



あさだ まさひさ  
浅田 晶久 さん

昭和23年、京都生まれ。祖父の代からの瓦製造業。京都で一番新しい瓦屋だが、今では手造りの京瓦を生産する唯一の工房を主宰。社寺や一般家屋の伝統的な瓦製造に加え、勤と経験の技術を次の世代に効率的につなげるための職人技の科学的検証、フランスのデザイナーとのコラボなど、さまざまな新しい試みにも挑戦している。

鍾馗像をきっかけに、  
伝統的な瓦に親しみをもつ人が  
増えてくれば、うれしいです。



いちばん大きな  
鍾馗像が手にも  
つ刀は、竹で別に  
こしらえた凝った  
仕上げだ。「粘土  
では折れてしまっ  
て、細かい造形が  
できませんから」。



茶色をした粘土  
の炭素が反応して、  
焼き上がりは  
美しい鈍色(にび  
いろ)になる。「石  
膏型の合わせ目  
からはみ出した  
部分を、きれいに  
仕上げます」。

# 縁の下のカモチ

屋根の上で厄を除ける鍾馗さん  
京都で唯一の作り手は、瓦職人

祇園や西陣など瓦屋根の町屋が残る界限で、玄関の屋根に「鍾馗さん」が置かれる風景はいかにも京都らしい。その昔、三条の薬屋が立派な鬼瓦をつけたところ、邪気が跳ね返って向かいの家のおさんが病になり、対抗するため鍾馗像を屋根に据えたら完治したという話が由来とされる。その後は魔除け・厄除けとして京都の街に広がっていった。

現在、京瓦でその鍾馗像を唯一製造するのが、伏見の浅田製瓦工場。「瓦屋に生まれ、鍾馗さんは小学生から作ってます。親父がお駄賃をくれてね」と語るのは三代目の浅田晶久さん(70歳)。石膏型に粘土を詰めて型抜きし、高温の窯で焼き上げると、屋根瓦と同じ固く締まった素材の灰色の鍾馗像ができて

がる。向かいの家を睨まないよう目線をずらした鍾馗像もある。京都でも瓦屋根の家が減り、いつときは鍾馗像の注文も来なくなつた。ところがここ数年人氣が出て、ネット注文も増え、屋根瓦より鍾馗像造りで忙しい。「あがめて拝む対象ではなく、庶民の生活に寄り添った存在として鍾馗さんに親しんでほしい」と言う浅田さん。ゆえに鍾馗さんを新鮮にとらえる若い人に昔の人の思いを伝えたいと、鍾馗さん造りの講座も行う。

狭い京都の街でお互いさまと助け合い、無病息災を願う暮らししてきたなか、鍾馗像を置く文化がある。屋根の上から京都の人の日常を支えてきた鍾馗さんを、浅田さんは今日も丁寧な型から取り出す。

## 私もカモチです

人々の安心安全な暮らしを屋根の上から支えてきた鍾馗さんと同様、三洋化成工業も、暮らしや産業の様々な分野を支えています。



三洋化成工業株式会社

京都市東山区一橋野本町11-1

最寄りバス停は「泉涌寺道」



ハシアイ500m



「はたらき」を化学する。  
"Performance" Through Chemistry